

経済産業省での経験と 星の輝きと



審査業務部長
脇本 眞也

仕事編

経済産業省における私の歩み

1978年（昭和53年）に通商産業省に入省し、早いもので27年が過ぎました。私は技術系行政官として採用されましたが、この間、必ずしも技術ということに囚われないで、いろいろな部局に所属し、多くの経験を積むことができましたが、最も貴重な体験は3年間の海外勤務でありました。

1990年（平成2年）3月から3年間、ベルギーのブラッセルに勤務しました。ブラッセルというのは、現在のEU（欧州連合）の本部があるところで、当時はEC（欧州共同体）と呼ばれており、加盟国も12カ国でした。当時欧州では、1992年の市場統合に向けて熱心な議論がなされているところでした。経済分野に限定されてはありますが、戦争によらず、話し合いによる初めての国の統合の試みとして、欧州の人々の間で熱心に議論がなされており、日本からもこの試みに熱い視線が向けられておりました。その後、欧州の人々の思いが次第に現実のものとなり、市場統合が成功し、さらに通貨統合にまで発展し、現在は政治統合に向けての議

論がなされております。また、加盟国も当時の12カ国から現在では25カ国にまで拡大し、さらに増える勢いとなっております。このような欧州にとって重要な時期に、3年間議論の中心地ブラッセルでその動向を見守ることが出来たことは私にとっての何よりの貴重な体験となりました。

ベルギーから帰国してからの2年間は、貿易局の貿易保険課に所属しました。当時の通産省の貿易保険は、年間引受件数60万件、引受金額20兆円という世界でも最大級の規模で、私は貿易保険の企画室長と情報システム室長を兼任させていただきました。企画室長としての仕事は、保険全体の経営状況の監視、貿易保険の制度設計、国別の保険料率の設定が主なものでした。また、情報システム室長としての仕事は、保険事務のシステム設計、運用ということでした。私にとっては、初めての現業の管理業務であり、現業というものを知る良い機会でありました。その後、この部門は、独立行政法人日本貿易保険として当省から分離独立して運営されることとなりました。

1995年からの2年間は、つくばの産業技術融合領域研究所の研究調整企画官として先端技術の研究開発の

マネジメントの仕事を行いました。当時この研究所には日本中から産学官の優秀な研究者が集まり、「アトムテクノロジー」または「オングストロームテクノロジー」と呼ばれる研究を世界に先駆けて行っておりましたが、当時、米国から科学技術調査団が来日し、この研究に米国が注目した結果、その後の「ナノテクノロジー」ブームに繋がることになる訳ですが、このエピソードはあまり知られていないようです。

その後、基礎産業局鉄鋼課で技術振興室長として、我が国の基幹産業であり、重厚長大産業の代表格である鉄鋼業の技術開発を支援する業務に携わりました。

一口に鉄と言っても、普通鋼のみならず、高張力鋼、耐熱鋼、ステンレス鋼など多くの種類があり、我が国でしか生産できない高度の鉄鋼材料（注：私はこれをファインスティールと名付けました。）を開発することが、途上国の追い上げに対する唯一の対抗策であり、鉄鋼業界の技術者と膝を交えて日夜、技術開発論議や産業政策論議を交わす日々を送りました。

1998年から2年間は工業技術院の国際研究協力課長として、先進国と

は対等の立場での研究協力、途上国とは研究支援という目的での交流を進めるべく世界中を飛び回りました。この間、計18回の海外出張をしました。米、英、仏、独、露はもちろんのこと、APECにおける協力活動の一環として、中国、韓国、豪、ニュージーランド、タイ、ベトナム、ブルネイ、メキシコにも出張しました。

その後、2001年1月に通商産業省が経済産業省に改編されると同時に、私は関東経済産業局へ産業振興部長として出向し、翌年には中小企業庁に技術課長として着任いたしますが、これらの職務は共通して、やる気と能力のある中小企業やベンチャー企業をいかに支援するか、という一言に尽きるものでした。理念論に陥りやすい中小企業政策の企画立案の課程で、関東経済産業局時代に見て回った現場の感覚をいかに生かすか、というのがこの間の私の課題でした。

また、中小企業庁技術課長時代には、宮内庁から、天皇陛下の研究開発型中小企業への行幸のご希望が2度にわたって寄せられ、技術課において、昭島市のスタック電子(株)と、さいたま市の(株)住田光学ガラスへの行幸の手配を行いましたことも、今となっては忘れがたい思い出です。

以上のように、いろいろな分野で貴重な経験をさせていただきまし

た。振り返ってみますと、自分自身の未経験の分野に思い切って飛び込んでみるのが、自分の成長に繋がったものと思っております。現在はまた特許庁において知的財産政策という自分にとって未知の新たな領域に「挑戦」しております。

趣味編

夜空の星を眺めてみよう

最近宇宙の話題がマスコミを賑わせております。米国の火星探査機「スピリット」による火星表面の写真撮影、土星探査機「カッシーニ」による土星衛星群の観測、日本がハワイに建設した大型光学赤外線望遠鏡「すばる」による深宇宙の観測成果等、宇宙に関する話題が途切れません。そのためか例年に比べ数倍のペースでアマチュア向けの天体望遠鏡が売れているそうです。

私が小学生だった頃、世間一般の宇宙への関心はまだ低く、天文アマチュアという変わり者の代名詞のような時代でした。とりわけ私の育った四国の松山のような田舎ではそうでしたが、私はその頃たまたま小さな屈折式天体望遠鏡を買ってもらう機会に恵まれました。その小さな望遠鏡で初めて見たのが木星の縞模様と木星の周りを回る4個のガリレオ衛星、そして土星の輪でした。この時望遠鏡で覗いたこれらの天体の美しさと神秘的に魅せられ、以来私も天文アマチュアすなわち変わり者の仲間に加わることになってしまいました。

それ以来、高校を卒業するまで、晴れてさえいれば夜中に起き出しては望遠鏡で星をみました。後に谷村新司の曲で有名になった牡牛座の「昴(すばる、プレヤデス星団)」をはじめとして、琴座の環状星雲、オリオン座の大星雲、アンドロメダ銀河、メシエ天体、等々、これらを見

たときの感動は今も忘れられないものです。

ところがその後東京で生活するようになり、星を見ることもすっかり忘れたまま年月が経ってしまいました。再び星を見るようになったのは、1990年からのブラッセルに海外勤務中のことです。日本から遠く離れたブラッセルでふと見上げた夜空の星々が、子供の頃に四国の松山で見た星々と同じように輝いていたからです。当たり前と言ってしまうかもしれませんが、新鮮な感激でした。

その後帰国してみると、日本では宇宙への関心が随分高まり、9月12日が「宇宙の日」に指定され、各地に天文宇宙関連の公共施設が次々とオープンしていました。各地で地域の活性化を狙った天文台やプラネタリウムの建設プロジェクトが数多く見られ、さらに避暑地には天体望遠鏡を備えたペンションも出現していました。一昔前には考えられなかったことです。天文アマチュアもやっと変わり者の域から脱却できそうな状況です。

今年中に日本から見える天文現象としては、9月23日に昴(すばる、プレヤデス星団)が月に隠される現象(星食)が起こる予定です。また、5月上旬には水瓶座(エータ)流星群、8月中旬にはペルセウス座流星群も見られます。さらに特別な現象ではありませんが、10月下旬には火星が大接近し明るく輝くはずですし、11月上旬には金星が「宵の明星」として西の空に輝くはずですが、これらはすべて望遠鏡がなくても肉眼で見られるもので、難しい理論は別として、天文ショーとして眺めて楽しいものです。

カラオケで「昴(すばる)」を歌う人も、夜空の「昴」を見たことのある人は意外に少ないのではないのでしょうか。皆さんも、夜空の星を眺めてリフレッシュしてみませんか。

